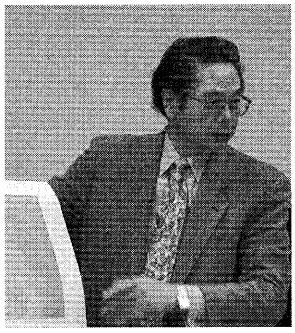
嶋　屋　征　一　教授



主なご経歴

昭和36年３月　岩手大学学芸学部特設美術科卒業
昭和36年４月　岩手町立川口中学校　教諭
昭和40年４月　岩手県立盛岡短期大学　講師
昭和46年４月　岩手県立盛岡短期大学　助教授
昭和57年４月　岩手県立盛岡短期大学　教授
平成10年４月　岩手県立大学社会福祉学部　教授

嶋屋先生の思い出

嶋屋先生というと、いつも穏やかでやさしく私たちに接し、落ち着いた口調でお話をされる姿が浮かぶ。批判めいたり揶揄するようなことはおっしゃらないので、どんなことを言っても受容される安心感が私たちにはあった。ご専門の現代美術のほうでは、所属するモダンアート展やエコール・ド・エヌ展に毎年出品され、若い頃には新人賞やパリ賞などを受賞された。個展も東京銀座の画廊を始めとして数え切れないほど開催されている。最近、国際インパクト・アート・フェスティバル出品のご常連であることも知った。県内では県立美術館の創設に尽力され、岩手県美術選奨選考委員や岩手県文化振興事業団評議員等さまざまの要職を歴任され、また団体展や岩美協の事務局などをいくつも引き受けておいでであった。学内では学部就職委員長や保育士委員会委員長などたくさんの役回りを淡々とこなし、いやぁーと謙虚な先生であった。

県立大学に異動する前、先生とは県立盛岡短期大学保育科で一緒であったので、そこでの思い出の一端を紹介する。研究室を訪ねると隣接する図画工作室から「はぁーい」とゆったりした声が返り授業の準備や後片付け、また制作に専念する先生のお姿があった。夏には窓ぎわや壁側の机一面に素焼きの器が並べられていたが、これは園長も兼任された付属こまくさ幼稚園の園児の修了記念の器で、秋の半日、園児は先生に絵付けを指導してもらい、その後、グラウンドで先生のあげる凧を歓声をあげて楽しみ帰園するものだった。また冬の本焼きでは、先生は窯出しのドラマティックな展開を園児に味わわせたくて、陶芸室で汗だくだくになりながら器を入れては取り出す作業を繰り返された。園児の目の前で透明でまっかに燃え上がったかたまりがパチパチと澄んだ音をさせながら見る間に黒やこげ茶、赤、橙、黄色、緑、白と色を現してくる様子は息をのむほど美しく、先生の子どもたちへの深い慈しみと美意識涵養を強く感じたものである。短大時代、先生の指導された美術部の学生は卒業後「九人会」なるグループを結成し昨年27回展を開催したが、先生が継続して賛助出品されていることは言うまでもない。

先生はいつでもどこでも美しいものに出会うと、さっとカメラにおさめられた。短大の校舎は小さかったが樹木が多く、先生は季節ごとにそれらを丹念に撮影されて公立大学の味気ない大学案内を自然の息吹あふれる美しいパンフレットに生まれ変わらせた。授業のため色々な素材に触れたり集められたりすると、それが後日先生ご自身の作品に反映されるといった具合であった。

先生が退職されお会いできなくなることは淋しいことであるが、岩手山の見える小岩井のアトリエで、心ゆくままに創作に励まれるであろう先生のお姿にうらやましい気持ちも湧いてくる。嶋屋先生、長い間、至らぬ私たちに温かくお付き合いくださり、本当にありがとうございました。

（雫石礼子）